教育方法に関わる意識形成と学校ボランティア活動

鈴 木 そ よ 子

要旨

神奈川大学湘南ひらつかキャンパスの学生たちが、2008年11月から2014年度現在まで継続してきた学校ボランティア活動について報告し、教育方法に関わる学生たちの意識形成について考察する。学生たちは本キャンパスの位置する神奈川県平塚市、そして隣接する秦野市にある小・中・高等学校で学校ボランティア活動を継続してきた。学校ボランティア活動の成果は多面的に捉えることができるが、本稿では、「子どもを見る目」「指導者としての子どもたちとの関わり方」「授業づくり」「子どもの成長の意味」をめぐって、学生たちのレポートから見い出せる彼らの「気づき」に焦点を当てる。

教育方法の分野では、様々な理論や実践が蓄積されてきたが、この分野は自分自身が体験し、見出すことで、理解でき、実践力が身につく分野でもある。また、一つひとつのケースによって、意味内容が異なってくる分野でもある。それゆえ本稿では、学生のレポートからの引用文が長くなるが、それぞれの出来事や文脈の中で彼らの教育方法に関わる「気づき」を理解することに重点を置いた。

キーワード：
学校ボランティア活動　教職課程　教育方法　小・中・高等学校

はじめに

神奈川大学湘南ひらつかキャンパスでは、教職課程を履修している学生たちが、2008年11月から2014年度現在まで、授業期間と休暇期間を通して6年間にわたり、学校ボランティア活動を継続してきた。本キャンパスの位置する神奈川県平塚市や隣接する地域に支えられて、学生たちは教師の視点で教育活動を見る経験や、職場として学校を見る体験を重ねてきた。教員としての心構えや教育実習に出る準備、教員採用試験の受験準備として、学校ボランティア活動の果たしてきた役割は大きい。

鈴木（2011）では、2008年度から2010年度を対象期間として、学校ボランティア活動を開始した経緯と具体的な運営方法について報告したうえで、教員養成の立場から見た学校ボランティア活動の意義について考察した。

本稿では、2014年度前期までの実施内容をまとめたうえで、学生たちのレポートを資料として、初等・中等教育の教育方法に関わる彼らの意識形成について考察する。

1　2008～2014年度の学校ボランティア活動実施校

学校ボランティア活動の主な学校は、平塚市立みずほ小学校、平塚市立土屋小学校、平塚市立土沢中学校、県立秦野曽屋高等学校であるが、横浜キャンパスの教職課程支援室の紹介で横浜市立羽沢小学校に行く学生もいた。また、県教育委員会の紹介で県立伊勢原高等学校の部活動に関わった学生もいた。本節では、平塚市立みずほ小学校、平塚市立土屋小学校、平塚市立土沢中学校、神奈川県立秦野曽屋高等学校における活動について述べる。

1.1　平塚市立みずほ小学校

平塚市立みずほ小学校は、学校ボランティア活動の端緒となった学校である。理学部の3年次配当科目「インターンシップ準備演習」では、企業や官公庁と並んで学校でのインターンシップも実施しており、2008年9月上旬から2週間、

みずほ小学校において、学生1名がインターンシップを行っていた。平塚市立みずほ小学校を訪問するようにと科目担当者から鈴木に依頼された。この訪問がきっかけとなって2008年11月から学校ボランティア活動を始めた。

みずほ小学校は、2008年度当時、全校生徒数229名、1年生2クラス、2～6年生1クラスの構成で、中規模の落ち着いた学校であった。交通の便をみると、本キャンパスからみずほ小学校まで行ける直通の路線バスはない。徒歩では40分かかる。希望する学生たちはバス通学者であったため、彼らの授業の空き時間を活用してボランティアに行くために、2008年度から2010年度は鈴木が送迎を継続した。

2008年度後期の「試み」としてのボランティア活動の内容は、昼休みの遊びへの参加と掃除の補助であったが、2008年度の1月から始まった春期休暇中の活動以降は、授業中の学習補助、先生方の教材作成補助、学校行事の補助、校務さんの校務作業の補助等へと活動内容が広がった。小学校の先生方､児童、保護者の方々からとても評判がよく、毎年継続してほしいという依頼を受けてきたが、2011年度からは、学生が自分で行くことにしたため、みずほ小学校に行く学生は年間を通して数人となり、2013年度まで継続した。

1.2　平塚市立土屋小学校

平塚市立土屋小学校は本キャンパスの敷地に隣接している小学校で、1学年1クラス、全校児童数が100名を超える位の小規模な学校である。

2009年4月下旬に、校長先生からボランティア学生を受け入れたいとの話を受けた。まず、みずほ小学校と同様に、昼休みを中心として土屋小学校に行くことから始まった。後期からは、授業内の学習補助から校務の手伝いまでを含む教育活動に参加するようになった。

学生の熱心な取り組みが評価され、毎年、次年度の継続を希望され、現在に至っている。2009年度前期は少人数で活動を始めたが、今では、小学校のボランティア活動を希望する学生の主な活動校となっている。

1.3　平塚市立土沢中学校

平塚市立土沢中学校は、本キャンパスから徒歩10分程度の距離に位置する。

2011年度後期から本格的に学校ボランティア活動が始まり、数学、理科を中心に、授業補助と放課後の補習の指導、運動会等の学校行事の準備や練習期間並びに当日の補助が主な活動となっている。

土沢中学校での学校ボランティア活動が他のボランティアと異なる点は、平塚市教育委員会の教育事業の一環として始まった点である。そのため、中学校については、当面は土沢中学校のみでボランティア活動を行うという限定的な関係で実施している。学生向けの説明会では学校長が説明者となり、スケジュール表も各学生の予定表も中学校で作成したのち、大学で学生に手渡して学校ボランティア活動を開始している。

1.4　県立秦野曽屋高等学校

神奈川県立秦野曽屋高等学校は本学の高大連携校の１校であり、1週間を通して放課後に「曽屋塾」の名称で英語・数学・物理の補習活動を行っている。本キャンパスの学生は数学、物理を担当している。2人の講師で学年の異なる7名の生徒を担当するクラスもあった。

曽屋高等学校は本キャンパスからバスを乗り継いで40分度ほどの場所にある。教科書や参考書は、曽屋高等学校にも本キャンパスの資格教育課程支援室にも備えている。学生は自分でプリントを作成するなど、担当する個々の生徒に応じた指導を工夫している。

2　学校ボランティア活動への参加学生数

教職課程に本登録した後の2年次以上の学生が学校ボランティア活動の対象者となっている。2008年度から2014年度前期までの学校ボランティア活動に参加した学生数は、表1「学校ボランティア活動参加学生数（2008年度後期～2014年度前期)」の通りである。1人の学生が同学期中に複数の学校に行っている場合もあるが、これは１人と数えて、学期ごとの実人数を挙げる。

表１　学校ボランティア活動参加学生数（2008年度後期～ 2014年度前期）

学期 / 年度	前期	夏期	後期	春期
	5 ～ 7月	7 ～ 9月	10 ～ 12月	1 ～ 3月
2008			12	27
2009	24		28	9
2010	35		23	
2011	11			18
2012	45	4	37	20
2013	37	4	38	12
2014	31	4	32	

出所：各年度の参加者一覧表より鈴木作成

表１の「前期」（5 ～ 7月）、「後期」（10 ～ 12月）の人数は大学の前期、後期の授業期間中に授業のない時間帯や授業のない日を選んで、学校ボランティア活動に参加した学生数である。学部学生が中心だが、科目等履修生、大学院生も参加している。

「夏期」（7 ～ 9月）は土沢中学校が対象となっており、定期試験終了後の7月下旬・8月・9月に、生徒たちの補習、9月中旬に行われる運動会に向けての練習や当日の補助を行った学生数である。

「春期」（1 ～ 3月）は、小学校・中学校・高等学校ともに実施しており、大学の授業期間中にボランティア活動ができなかった学生や、一日を通しての活動を希望する学生が参加している。

これまでの学校ボランティア活動の参加者と教育実習実施学生を照らし合わせてみると、本キャンパスの教職課程の学生はほぼ学校ボランティア活動をしたうえで、教育実習に出ていることがわかる。

3　キャンパス内の実施体制

3.1　授業科目

2008年度から2014年度に至るまで、「教職に関する科目」のなかの1科目に学校ボランティア活動を位置づけてきた。学生自身に即してみると、半期のみ

登録する場合もあり、前期と後期で科目名が異なる年度は、前期と後期に登録する場合もある。また、単位修得後も継続して学校ボランティア活動に参加する学生も多い。学部時代、大学院時代を通して5年間継続した学生もいる。単位修得後の学生は、科目登録ができないため、有志として授業に参加し、グループ分けされたクラスに加わり、後輩たちへのアドバイザーの役割を果たしている。

学校ボランティア活動に係る授業の科目名の変遷を「表２　学校ボランティア活動の授業名（2008 ～ 2014年度)」に示す。

表２　学校ボランティア活動の授業名　（2008 ～ 2014年度）

学期／年度	前期	備考	後期	備考
2008			総合演習Ⅰ	旧カリ必修科目、複数コマ開講の1コマ
2009	総合演習Ⅰ	旧カリ必修科目、複数コマ開講の1コマ	総合演習Ⅰ	旧カリ必修科目、複数コマ開講の1コマ
2010	総合演習Ⅰ	旧カリ必修科目、複数コマ開講の1コマ	総合演習Ⅰ	旧カリ必修科目、複数コマ開講の1コマ
2011	学校ボランティア演習Ⅰ	新カリ選択科目、1コマ開講	学校ボランティア演習Ⅱ	新カリ選択科目、1コマ開講
2012	学校ボランティア演習Ⅰ	新カリ選択科目、1コマ開講	学校ボランティア演習Ⅱ	新カリ選択科目、1コマ開講
2013 2014	学校ボランティア演習Ⅰ	新カリ選択科目、2コマ開講	学校ボランティア演習Ⅱ	新カリ選択科目、2コマ開講

出所：各年度の『資格教育課程履修要覧』、時間割表より鈴木作成

2008年度後期は授業開始後に学校ボランティア活動を開始した。そのため、複数コマ開講の必修科目「総合演習Ⅰ」のうち、鈴木クラスの学生が授業と並行してボランティア活動を行った。

2009・2010年度は、年度当初の教職課程の説明会で、学校ボランティア活

動を希望する学生は鈴木クラスの「総合演習Ⅰ」を履修するようにと案内した。前期も後期も同一科目が開講された。

2011年度からは教職課程の選択科目である「教科または教職に関する科目」として前期「学校ボランティア演習Ⅰ」、後期「学校ボランティア演習Ⅱ」が開講された。

2012年度からは、前期「学校ボランティア演習Ⅰ」、後期「学校ボランティア演習Ⅱ」を、他の授業の登録に支障のない土曜日に開講し、同じ曜日時限を希望する数人が1グループとなり、そのグループを1クラスとして集まる方法をとることにより、参加希望者が全員参加できるようになった。

3.2　参加者の募集方法

年度初めのオリエンテーションやガイダンスで、1年間の説明会日程表を配付する。ここに学校ボランティア活動の年間の説明会日程も記載されている。また、オリエンテーションやガイダンスの内容の中に学校ボランティア活動についての案内も加えている。説明会は4月、7月、9月、1月に実施しており、その都度、参加者に要項を渡し、説明し、資格教育課程支援室に申し込むという手順で進めてきた。

小学校の場合は、申込み人数を学校に伝えて、必要に応じて、一日の参加人数を調整し、資格教育課程支援室でスケジュール作成等の作業をする。完成したスケジュールは小学校と参加学生一人ひとりに手渡す。庶務課にも書類を届けて、通用門の開閉を依頼する。

中学校の場合は、学生一人ひとりの申し込み用紙を中学校に渡し、中学校で調整後のスケジュール表や個人の表を作成した後、資格教育課程支援室を通じて、学生一人ひとりに個人の表を手渡す。このような準備を経て、学校ボランティア活動が始まる。

3.3　事務局の協力

2008・2009年度は、鈴木が学校との打ち合わせから実施計画の作成、スケジュール表の作成、具体的な運営までを担っていたが、2010年度からは、学校ボランティア活動の事務作業が、本キャンパスに新たに設置された資格教育

課程支援室の業務の一部となった。学校との連絡や説明会の準備並びに当日の運営、申込み、スケジュール作成等多くの事務的な作業が資格教育課程支援室に任せられるようになり、鈴木は授業運営や学生のサポートに集中できるようになった。この事務体制は年々充実し、現在に至っている。

3.4 授業運営

2011年度の「学校ボランティア演習Ⅰ」は一般の授業と同様に、開講曜日時限に登録できる学生が、学校ボランティアに参加するという方法をとった。だが、この方法では、学校ボランティア活動に参加することを希望する学生がいても、この授業を登録できるとは限らない。説明会に出て申し込み、学校ボランティア活動に参加しても、集まる機会も経験をまとめる機会もないまま終了してしまう学生もいた。前期は開講時限に登録できた学生たちがいたが、後期は登録できず、授業は休講となり、鈴木も全体の把握ができなかった。これを改善すべく2012年度から異なる方法で授業運営をすることにした。

2012年度以降の運営方法は、同一の方法をとっている。説明会の時点で参加者一人ひとりが集まることのできる曜日時限を用紙に記して提出する。学期によって異なるが、6クラスから8クラスに分かれる。学生から見ると、1週間に1度以上学校ボランティア活動に参加したうえで、さらに授業に出席するということになる。登録曜日時限に全員が集まっても十分な話し合いや報告会もできない。そのため、一人ひとりが感想を報告し、他の人の意見を求められるように少人数のクラスに分けて授業を行っている。1クラスごとに１ヶ月に1回集まる。

1回目は自己紹介をして、説明会の内容を補足する形で、全体的な注意事項について説明を受ける。加えて、初めて学校ボランティア活動に参加する学生からの質問と経験者からのアドバイス等が主な内容である。

2回目は半月間から1 ヶ月間の活動について報告し、困っていることや相談したいことがある場合は学生同士で意見交換をする時間をとる。大学と学校の間で調整すべき内容がある場合はすぐに鈴木が連絡をとる。

3回目は前回から1 ヶ月間の報告をし、経験を互いに語り、聞き、語り合う。さらにレポートの書き方についての説明を受ける。

4回目は学校ボランティア活動も終盤の頃に当たる。レポートを印刷物とデータで持ち寄り、クラスごとでレポートを発表し、推敲しあう。誤字・脱字から内容や表現まで、参加者で検討した成果を盛り込んで完成したレポートを提出する。

3.5　活動報告書、レポート

学生は活動日ごとに報告書を作成する。土屋小学校と秦野曽屋高等学校の場合は、A5の報告用紙が資格教育課程支援室に用意されており、「学校ボランティア演習」のメールボックスに提出する。すべて鈴木が目を通して、コメントを付けて同じメールボックスの返却用ファイルに入れて返却する。この往復はボランティア終了まで繰り返される。

土沢中学校ではA4の報告書用紙が用意されており、活動日ごとに最後の10分間を使って報告書を書き、提出して下校する。必ず校長先生、教頭先生が目を通して下さる。これもボランティア終了まで繰り返される。

授業の最後に、学生は日々の報告を資料としながら、活動全体を振り返り、A4用紙1枚，約1600字のレポートを作成する。このレポートは、次のような条件のもとで作成している。

①テーマの視点

以下の3点のいずれかの視点を選ぶ。

A　印象深かったこと

B　立場が変わることによって初めてわかったこと

C　学校ボランティア活動前後の自分の変化

②タイトル

自分のレポートのテーマを1フレーズで表す。レポートで最も伝えたいことを表現する。

③段落の構成

A　第1段落

自分がどこでどのような活動をしたかという活動の概要を整理して書く。これは読み手にとって、第2段落以下の主張の根拠を判断するための情報と

して必要なものとなる。

B　第2段落

ワンフレーズで表したタイトルの内容を文章で表現する。レポートのテーマを詳しく説明する。第2段落全体をこのために使う。

C　第3段落以降

第2段落で書いた主張の意味が分かるように、具体的な説明や実際の出来事を交えながら記述する。

1クラスごとにメンバー相互の検討を経て完成したレポートは、表3「学校ボランティア活動レポート集掲載誌一覧（2009～2014年度）」に示すように、2009年度からすべて神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学　心理・教育研究論集』に掲載している。

表3「学校ボランティア活動レポート集掲載誌一覧」（2009～2014年度）

学校ボランティア活動実施年度学期	『神奈川大学　心理・教育研究論集』掲載号、発行年月日	ページ
2009年度前・後期	第30号、2011年3月31日	pp.88-127
2010年度前・後期	第30号、2011年3月31日	pp.128-168
2011年度前期	第32号、2012年11月30日	pp.153-163
2012年度前期	第32号、2012年11月30日	pp.165-211
2012年度後期	第33号、2013年3月20日	pp.147-185
2013年度前期	第34号、2013年11月30日	pp.139-162
2013年度後期	第35号、2014年3月20日	pp.247-280
2014年度前期	第36号、2014年11月30日	pp.89-114

出所：『神奈川大学　心理・教育研究論集』各号より鈴木作成

4　採用試験における学校ボランティア活動の位置づけ

教職課程で学生たちに学校ボランティア活動を勧める背景のひとつには、教員採用試験がある。公立学校の教員採用試験は1次試験と2次試験からなるが、近年、文部科学省が学校ボランティア活動を奨励して以降、1次試験の提出書

類の項目として学校ボランティア活動経験の有無と活動から学んだことを記述するケースが多くなっている。また、小論文や自己アピール文でも同様な内容が求められる。また、2次試験では、個人面接でも学校ボランティア活動に関わる質問を受けたという報告が多い。それほどに学校ボランティア活動が重視されるようになっている。

採用試験で学生時代の学校ボランティア活動の経験の有無とその経験から得たものが重視されるのには、それなりの理由がある。筆記試験に加えて、集団討論、集団面接、個人面接、小論文、模擬授業等を実施し、多面的に受験生を見て選考して採用しても､数ヶ月で辞職してしまう新任者がいる。理由として、自分が想像していた職場と異なる、これほど大変だと考えていなかったという答えが返ってくるという。職場としての学校の実態がわからないまま教員になり、初任者研修期間に辞職する。教育委員会はこのような事態を避けたいという。もちろん教育実習はだれもが経験するが、これとは異なる質の学校体験が必要だという。

教育実習は4年次生で行い、2週間から3週間の短期間の間に、オリエンテーションから､授業参観等を経て､研究授業ができるところまで教育実習生を「仕上げる」ことになる。これ以前に長期に亘り、学校でボランティア活動をしていたかどうかは、職場としての学校をわかったうえで教員採用試験を受験しているのかどうかを見分けるひとつのバロメーターになる。また、この活動は授業時間以外の時間を費やすことになるのだから、本気で教員を目指してきたのかどうかを見分ける目印になるのは確かである。

学校ボランティア活動における学生の立場は、児童や生徒とは異なる。教育実習生とも異なる。教員の教育活動、児童・生徒の様子、学校全体の教職員の協力体制などを、第三者として身近にみることができる。この経験を通して、学生自身が学校という職場で仕事ができるかどうかを自己判断する機会にもなる。だからこそ、教育委員会はこのような体験を経た人物なのか、その体験をどのように自分自身で受け止めているのかという点に強い関心を持ち、評価の対象としているのであろう。

5. 教員養成の立場から見た学校ボランティア活動の意義

学生たちは小学校から高等学校まで、児童・生徒として学校に通ってきたのだから、教員の仕事をわかっているだろうと推察してしまいがちだが、学生たちは児童・生徒だった当時、まさに児童・生徒の立場で学校生活を体験していたのであって、先生の仕事内容全体についてはわかっていない。

さらに、自分たちが学んだいわゆるゆとり教育といわれる1998（平成10）年改訂の学習指導要領と、自分たちが教員として教える2008（平成20）年改訂の学習指導要領の違いも理解しなければならないという課題も重なって、学生たちは教育方法と教育課程について改めて学ばなければならない。

このような状況の中で、実際に小学校や中学校、高等学校に通って、継続的に学校の活動に加わる機会を得ること、先生と生徒の関わり方を見る機会を得ること、生徒たちの学習活動の補助をする機会を得ることが、学生たちの意識を徐々に変化させている。

鈴木（2011）（pp.75-76）では、小学校のみで学校ボランティア活動を行っていた当時の学生の変化をみて、教員養成の過程で学校ボランティア活動を行う意義を次の11点にまとめている。

① 児童と関わっている時以外の先生方の仕事内容がわかるという点である。授業準備、テストの丸つけ、提出物の確認、職員会議、学年会議、市内の研究会、学校行事の準備、校内の整備、学校の田畑に関する作業等々。学生たちには、これほど多様な仕事をしているのかという驚きがあった。

② 子育てのために協力している大人のつながりを、身をもって知ったという点である。校務さんの仕事振りに学生たちは感心した。児童・生徒が安全な学校生活を送るためになされている具体的な作業や工夫を初めて知った学生も多い。また、保護者や地域の人々の協力も改めて実感した。

③ 学生自身が子どもたちと関われるかどうかを体験的に掴むことができた点である。教職を志望する学生にとって、自分の「適性」を判断する、とても大切な機会になった。学生たちは、はじめて知りあう子どもたちとの人間関係を、回を重ねるごとに作り上げていった。名前を覚えることで、互いの親

しみが大きく変わることも、学生たちに印象探かったようだ。どうしても子どもたちの中に入り込めない学生の場合は教職を諦めるか、あるいは、白分自身を変えていく必要性があることもわかったようだ。

④　今の子どもたちを知ることができるという点である。子どもたちの遊び、友達との関わり方、学習の様子等が分かるだけでも貴重な経験になる。

⑤　先生方が集団としての子どもたちとどう関わっているのか、個人としての子どもたちとどう関わっているのかを、具体的な場面で学べた点である。授業の進め方、叱り方、平等に関わるための留意点等、学生たちは様々な一瞬にこの点を学びとっていた。

⑥　授業において、先生方が子どもたちをひきつけ、子どもたちが理解できるようにと重ねている工夫を、学生自身が授業をするつもりになって学びとってきたという点である。

⑦　一人ひとりの子どもたちに対する先生方の細やかな心配りを知った。先生方は、ほめる、叱る、注意するなどの一つひとつについてタイミングや話し方、内容等、子どもによって変えていた。

⑧　子どもを見守ることの大切さ､自分でできるようにサポートする大切さを、身をもって体験してきた点である。「できない」という子にすぐ手伝えばいいのではない。その場を見極めて、どうすることがその子のためになるのかを考えなければならないということだ。

⑨　小学校の学習場面に立ち会えたこと自体が、中学校･高等学校の教育実習の準備になったという点である。学生は小学校の算数が自分で解けても、小学生の解き方で、今「わからない」と言っている子どもに説明することができない。こういう場面に何人もの学生が直面した。彼らは中学･高校で実習をするが、その学校の生徒たちが小学校で学んだ学習内容と方法を把握して初めて、その中学･高校生のつまずきを理解し、その子に即したアドバイスができる。

⑩　小学校1年から6年までの学級に関わったことで、6年間の成長を目の当たりにできた点である。授業から給食、遊びまで一緒に過ごしたので、その成長に対する学生の感慨は非常に大きかった。

⑪　教育実習生ではなく、第三者として継続的に学校に入ることができた点で

ある。学校ボランティア活動は、教育実習で初めて学校に入るのとは全く異なるのだということを学生の報告やレポートから強く感じた。教育実習では得難い学校理解、子ども理解、教職に対する理解を育むことができる。それゆえに、学校ボランティア活動は、教育実習に行く学生の事前指導として意義深いものだと判断する。

上記のまとめの時点から2年半を経た現在もこれらの意義は変わることがない。さらに、2011年度以降は、中学校・高等学校の学校ボランティア活動が加わり、自分が教壇に立つ校種とボランティア校が一致することによる直接的な意義も加わっている。

6　教育方法に関わる意識形成

学校ボランティア活動の意義が顕著に見い出せる分野として、教育方法に焦点を当てる。一般的に言える教育方法についてはこれまで様々な理論や実践が積み重ねられてきたが、教育方法は自分自身が体験することによってはじめて実感を持って気づき、身につき、実践できる分野でもある。

学生がボランティアに参加するたびに提出する「学校ボランティア活動報告書」を読み、毎月の報告と学期末のレポート発表を聴き、また、学校の先生方から学生の活動ぶりについて話を伺うなかで、教育方法に対する学生自身の意識形成を確認することができる。彼らが気づいたこと、発見したこと、認識したことは具体的で説得力がある。その「気づき」や「発見」は、一人ひとりが異なる。本稿では学生の体験と彼らが考えを育んだ経過に着目する。教育方法の視点から、共通する点を見出し、「子どもを見る目」「指導者としての子どもたちとの関わり方」「授業づくり」「子どもの成長の意味」という４つの観点に絞って、レポートの一部を例示する方法で、彼らの「気づき」の内容を紹介するという方法をとる。

6.1　子どもを見る目

2012年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した情報科学科3年次生の栗原史帆さんは、過去の出来事や印象にひきずられることなく、常に新鮮な

目で子どもたちと関わる大切さを身をもって知った。「印象や決めつけを持たず，常に新鮮な視点からみていくことの大切さ」と題したレポートの一部をここで紹介する。

私が今回感じたことは，固定概念を持たずに常に新鮮な視点から子どもたちをみてあげることの大切さです。しかし，場に応じた視点で見てあげることももちろん大切です。今までは，その場に応じた視点の方が大切であるという方が自分の中に大きくあり，今回感じた固定概念を持たずに一定の視点からみてあげるということは，意識もしていませんでした。

今回なぜ意識したのかというと，数時間一緒に過ごした中で，その時々の子どもたちをみることができて，その数回の中である一瞬ではありますが，いつもと違う、私が最初にどこかで決めつけていた印象とは全く異なる顔を見ることができたからです。

私は1年生の授業に3回ほど参加させていただきました。1回目，一緒に給食を食べた時に，あまり落ち着きがなく，自分のしたいことなどを授業中でもすぐに行動に移してしまう，私がそんな印象を持った男の子がいました。

もうすでに何度か給食を食べたことはありましたが，初めて授業に参加した回は，学級活動で，“クラス内で困っていること・クラスメートにやめてもらいたいこと”などを話し合うという内容でした。私の予想通りにその男の子はその時間にたくさん名前が挙げられて実質的に注意を受けていました。もちろん誰も嘘をついている訳でもないですし，その男の子も注意を受けて，思い当たる節がたくさんあるのか，下を向いて手いじりなどをしていました。

私も，そういう子なんだ……とその時に思ってしまい，そのあとの授業でも“また話を聞いてない……”というような目でその子のことをみてしまいました。

しかし，3回目の2時間続きの“図工”の授業でのその子の顔を見て驚きました。すごく集中していて，おしゃべりもいたずらも，自席を立つこともせずに，しっかりと座って自分の作りたいものをスケッチする作業を

行っていました。2時間目の図工になり，先ほどのスケッチとは全く異なる,床での作業になりました。床で15センチぐらいの棒（数え棒？）とペットボトルのキャップなどを使って自分で自由に作るというものでした。たとえば，ピカチュウを作りたい子は黄色の棒で輪郭を作り，その中に黄色のキャップを敷き詰めて表現したり，棒を並べて家の形を表現したりと比較的に動き回ることのできる授業内容だと思いましたが，その子は自分の作品を作っている範囲から全く動かず，黙々と自分の作品である迷路を作っていました。何度かは友達と見せ合ったりしていましたが，それも何度かであって全く授業には問題のない程度で，むしろ他の人の意見も取り入れるなど模範的だったと感じました。私はすごいなぁと思う反面，勝手に不真面目であるという印象を持って接していたことに，とても申し訳なさを感じました。

毎回100％新鮮な視点というのはもちろんできないと思いますし，前回からどういった成長があったかなどを知るときには，もちろん過去が必要になります。ですが，過去に印象を持ちすぎて，それで新しい印象に気づかずにいてしまうことはとても怖いと感じました。そして今回はとても申し訳なかったです。今回は，悪い印象から好印象でしたが，逆の場合もあると思います。どちらにせよ気付かずにいたら生徒の信頼を得ることはないし，無くしてしまう可能性が大いに考えられる出来事だったことから，この点が大切であると感じました。(『論集』第32号、pp.173-174)

2012年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した情報科学科３年次生の中島嵯恵子さんは、子どもの目線に立って考え、行動することの大切さに気づいた。レポート「子どもと一緒に成長できた自分」の一部を紹介する。

初めての小学校ボランティアだったので最初は緊張しましたし，子どもの対応に戸惑いもありました。ですが週に１回のボランティアを重ねて新しい発見があり，自身への課題を見つけ，今は成長できた自分を実感しています。授業の補佐では2年生の引き算の筆算が一番印象的でした。筆算の考え方から，書き方を学ぶ授業でした。道具を配り、分からない子ども

には丁寧に説明するのですが，分からないと自分から言ってくれる子は少ないです。手が止まっていたり違うことをして遊んでいたりする子，中には簡単だと言ってあっという間に終わらせている子もいました。教え方も様々でその子に合った説明の必要があり，一人一人の個性を感じました。給食を食べる時には子どもが自ら進んで席を作ってくれ，大学生が来ることをとても喜んでくれます。初対面の私にも無邪気にいろいろと話しかけてくれました。神奈川大学の先輩方が築きあげた小学生の子たちとの信頼関係を感じ，自分もそういう関係を作っていけたらいいなと思いました。

子どもたちの行動やささいな発言にも，とても考えさせられるものがありました。大人にとっては当然のことも，子どもたちからしてみれば新鮮な発見ばかりで，その捉え方はばらばらでした。中には私には考えられないアイディアもあり，なるほどと感心することもあり私自身驚きました。

子どもの目線になって考えることは私が長い間忘れていたことで，思い出すとともに気づかされることも多かったです。相手の立場になって考えることは小学生に限らず，どのような場面でもいえることで，教師になる上で必要不可欠なことだと実感しました。(『論集』第32号、pp.174-175)

6.2　指導者としての子どもたちとの関わり方

2011年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した国際経営学科２年次生岩尾拓哉くんは「指導するということ」と題したレポートで、クラス全員を意識して子どもたち全員に気を配っている先生の姿をクラスづくりの原点として捉えている。

私（略－鈴木）は，先生の傍でお手伝いをすることで初めて先生の立場から子どもたちを見て，子どもたちの成長を妨げずに育むことの難しさを知った。もちろん先生になれたわけではないので難しさの本質は見えていないだろうが，少し垣間見ることができたのではないかと思う。それは，授業時に先生を見ていて，問いかけをして子どもたちに考えさせるようにしていたり，時間が許す限りわかるまで同じことを教えていたりしていたのを見て感じた。先生は子どもたち全体，クラス全員を意識していた。

私はそのような先生の姿を見て，なるべく子どもたちみんなに話しかけてさびしい思いをする子がいなくなるように心掛けて行動した。しかし，子どもたちの中には積極的に話しかけてくる子もいて，無視はできないので，容易ではなかった。そのためにもいろんな子に目配りをし，内気な子や問題を抱えている子をケアしながらも積極的に話しかけてくる子どもたち，みんなに気持ちが届くような関わり方を見出すように努めてみた。そうすることによって学級があたたかみのあるもの，安心感のあるものになっていくのではないかと思った。(『論集』第32号、p.155)

2011年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した生物科学科２年次生中舛絵里奈さんは「先生としての子どもへの接し方について」と題したレポートにおいて、先生が注意するという具体的な場面でクラス全体を集中させる方法に注目している。

どうやって叱れば子ども達が言うことを聞いてくれるのか。どうやっていけないことを教えればいいのか。約2ヶ月間，色々な先生の叱り方を見てお手本にしようとしていました。その中でも，なるほどと思ったのは4年生の先生の叱り方でした。授業が始まる前に,「大事な話がある」と言って子ども達が静かになるのを待つ。最初は，子ども達も隣の人とおしゃべりしたりしてざわついていたのですが，先生がずっと黙って子ども達を見つめているうちに，子ども達は大事な話なのだということがわかり，次第におとなしくなり，最後には教室がシーンとしました。そして，シーンとしたその後でようやく先生は口を開いて子ども達に話し始めました。そこでの話は，10マス計算で「ずる」をしている人がいる，という話だったのですが，それはいけないことだと子ども達は皆理解したようでした。

まず，叱るためには子ども達へ，どれだけ自分が真剣であるかをわかってもらうことが大切なのだなと思いました。いつもヘラヘラ笑って「駄目だよ〜」と言うだけでは､伝えるべきことを何も子ども達に伝えられない。それに気づいた私は，いつも笑顔でいることも大切だけど，大切なときには子ども達の目を見つめ，真剣な顔で話さなければいけないのだなと思い

ました。(『論集』第32号、pp.158-159)

2011年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した総合理学プログラム２年次生馬場智香さんは、「素直な気持ち」と題したレポートで、子どもたちのけんかに直面し、言葉の与える影響の大きさとその指導の重さに気づいたと述べている。

5年生では理科の授業でかぼちゃの苗を植えました。小学生と一緒に草をとり，土を耕して，2人1組でかぼちゃの苗を植えました。かぼちゃの苗を植えていると，1人の児童の発言がきっかけでけんかが起こりました。

小学生なのですごく小さなことが原因で，何故か大きなことに発展してしまい，1人の児童が「死ね」と発言してしまったのです。その発言について，それぞれが自分の意見を言い合い，泣きそうになりながらも「死ねという言葉はいけない」と訴える女の子もいました。「死ね」という言葉について，個々でいろんなことを感じたのだと思います。最近は意味もなく「死ね」などの言葉を使ったり，口癖になったりしている児童もいる中で，土屋小学校の児童が本当に素直に物事を感じることができているので感心しました。結果として仲直りできたかはわかりませんでしたが,「死ね」という発言をしてしまった子も反省をしているようでした。その児童は軽い気持ちでそのような発言をしてしまったのかもしれません。しかし，その発言について他の児童の反応が予想以上に大きかったために，言葉の重さに気づくことができたように私からは見えました。学校の先生や私たちボランティアの力を借りずに，自分たちだけでしっかり問題を解決していました。

今の時代の子どもたち,私たちの世代も「素直な気持ち」を忘れてしまっていると思います。土屋小学校のみんなを見ていて，改めて自分に素直になることの大切さに気づきました。(『論集』第32号、p.161)

2012年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した情報科学専攻１年次生の刈部真里さんは、帰りの会に立ち会ったとき、クラスづくりの工夫を見

出している。「授業外の活動の工夫」と題したレポートから、その一部を紹介する。

５年生の帰りの会を見学したときのことです。５年生では，帰りの会の時間に日直が一日で一番頑張ったと思う人を言う時間が与えられています。その日,日直になった男の子がその時間で,「今日頑張ったと思う人は,５年１組のクラス全員です」と言いました。しかし先生は「クラス全員が頑張っているのは当たり前。その中でも頑張っている人を見つけるんだよ」と言っていました。日直の男の子は，しばらく考え込んでから，誰が，何を頑張っていたかを発表しました。誰にでも言える，ありきたりな言葉ではなく,自分の考えをしっかり持つことを大切にしているのがわかります。

また，１年生の帰りの会では，日直が一日で何が一番楽しかったかを発表します。「生活が楽しかったです」と言う子もいれば，「国語が楽しかったです」と言う子もいて，それぞれがしっかりと意見を持って発表しているのが見えました。また，それだけではなく，その日に誰かが良いことや悪いことをしていたらそれを発表する，ということもしていました。悪いことをした，という報告を聞いたら「じゃあ，それを直そうね」と指導し，良いことをした報告を聞いたらしっかりと褒めます。これによって相手の良いところを見つけることが自然と出来るし，かつ，悪いことは悪いと言える環境も作れる，とても良い取り組みであると思いました。(『論集』第32号、p.169)

6.3　授業づくり

2011年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した総合理学プログラム２年次生の堤有起子さんは、授業の場面で子どもたちとコミュニケーションをとる時に、教師が本題をきちんと押さえたうえで意見の交通整理をしていく大切さを見出している。「子どもと教師が作る空間」と題したレポートからその内容を紹介する。

一番自分にとって勉強になったのは授業のお手伝いである。私は塾の講

師をやっているが，やはり学校という生の授業はまた少し違った。学校とは一方的に勉強だけを教えるところではない。子どもは一人ひとり個性が全く違い，ひとつの問いかけに対し10人いれば10の意見が返ってくる。しかも低学年になればなるほど間違いなどを恐れずに発言してくるので突飛な意見も多数出てくる。私が感心したのはそれらに対する先生の受け答えだ。時には道を外れてしまいそうな意見も出てくるだろう。しかしそんな意見も決して否定するだけではない。また周りの子どもにそれについて意見を求めるのだ。そしてうまくいいところを吸収し，かつしっかりと本題の道筋を修正する。そうやって誰もが自由に，そして周りに気を遣って発言できる空間が出来る。そのような空間を作るには教師の存在が不可欠となるが,次第にそれが子どもたち同士で出来るようになる。友達が間違ったことをすれば友達同士で注意できる。その言い方がきつかった場合は「それは少し言いすぎだよ」と言えるようになる。友達のいいところを「それいいね！」と素直に言えるようになる。ごく当たり前のことだが，子どもがそのように育つ過程には，保護者はもちろんだが教師も想像以上に関わっているんだなと実感した。教師や子どもが違えば教室に流れる温度や匂い，雰囲気など様々なものも違ってくる。そしてそれらにそのクラスの「個性」が染み込む。私はそのような「教室」という空間を大事にしていきたい。(『論集』第32号、pp.160-161)

2012年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した化学科3年次生の宮下愛梨彩さんは、「児童の社会力・自立心をどう育成するか」と題したレポートにおいて、子どもたちが考えて答えを導き出す指導の在り方の大切さに気づき、自らの指導方法も変えていったことを報告している。

私は，ボランティアの初めは，こうしたほうがいい，などの正解を教えてしまうような指導をしていましたが，それではいけないのだと思い，その後児童に考えさせるように指導を行いました。児童に考えさせるようにしてから，私は児童に接することをより楽しめるようになりました。児童も進んで自分から行動するように変わったと思いました。このように自分

で考えさせることは，勉強に通じるものだと思います。児童が分からないと悩んでいたら，答えを教えてしまえば簡単ですが，それでは何も進歩していません。児童自身が考えなければいけません。私がするべきことは，答えを導くためのヒントを与えることです。小学校の先生方を、子どものころとは異なる見方をすることで，学ぶべきところを知ることができました。(『論集』第32号、p.178)

2012年度前期に横浜市立羽沢小学校でのボランティア活動に参加した国際経営学科３年次生の佐藤彩香さんは、グループ学習の場面に立ち会い、具体的な指導方法を体験している。そして、グループ学習の効果について「教師のあり方」と題したレポートにおいて報告している。

国語の時間の時のことであった。自分の好きな場面を朗読しようという内容で，グループで集まり朗読の練習をするという内容があった。そこでは，意見の対立や児童同士の批判等，人間関係特有の問題が生じていたが，多数決にしたらどうか，同じ場面の好きな子同士が集まるのはどうか，と様々な提案をしたところ，児童が納得してくれたことである。また，児童の朗読中ももう少し大きな声を出せれば他のグループよりも上手くなれると助言をしたところ，次の朗読では声が大きく出ていた。自分のアドバイスが児童に反映されていて嬉しく感じ，また指導をするということに少しの自信も感じた。(『論集』第32号、p.186)

2012年度前期に土沢中学校でのボランティア活動に参加した生物科学科４年次生小椋光さんは、わかることと教えることの違いを明確に自覚した。「教えるということの難しさ」と題したレポートの一部を紹介しよう。

私が今回中学校ボランティアに参加してみて一番考えさせられたことは，生徒に勉強を教えるということの大変さです。簡単な数学の「８－（－５）＝」という問題で，私は今では当たり前のように「マイナスの符号をプラスに変えてから計算する。」ということを頭の中で機械的に行って計

算していました。しかし生徒たちに教えるときは，どうしてこういう解き方をしなければならないのか，ということを説明しなければ理解につながらないので，今まで機械的にやっていたことを説明するということはとても難しいと感じました。英語では，「なんでbe動詞は動作じゃないのに動詞なの？」や「三人称単数形って何？」と突然聞かれてうまく説明できませんでした。今では頭で機械的にやってしまうことや感覚で覚えてしまったことを生徒にわかりやすく教えなければならないという「今となっては当たり前のこと」を教える難しさというのを実感しました。もっと中学生の立場になって考え，勉強しなければならないなと感じました。(『論集』第32号、p.190)

2012年度前期に土沢中学校でのボランティア活動に参加した生物科学科４年次生工藤若菜さんは､授業の展開方法と具体的な進め方を学び取っている。「積極的に学習に取り組ませるために」と題したレポートの一部を引用する。

興味を持たせるためには導入をどのように行うか，または補助教材や実験をどのように活用するかが鍵となる。

中学校２年生で習う，「動物の生活と生物の進化」の単元の「生命を維持するはたらき」の内容で出てきた肉食動物と草食動物の歯のつくりの違いを教える授業の導入は私から見てもとても面白く，この内容についてもっと知りたいと思えるような内容だった。まず人間は肉食であるか草食であるかを考えさせ，そのあとに生徒たちが飼っているペットの食べ物やテレビや動物園で見たことのある生物を取り上げて，食べるものに応じて肉食動物や草食動物に分けた後，それぞれに共通している歯，肉食動物にしかない歯などの名称や特徴について指導していくという内容であった。この時の生徒たちの様子はとても楽しそうで，友人同士でお互いの歯を見てみたりして授業に対してとても積極的な姿勢がうかがえた。

この時の授業について，授業後に担当の先生にお話を伺ってみると，人間をはじめ，犬や猫などはとても身近な生物であるため，例に挙げることで生徒の興味･関心を引き出しやすく，内容も入りやすいとのことだった。

このことからも分かるとおり，導入はとても大切な部分なのである。しかし，生徒が興味を持つような導入を行うためには，幅広い知識と表現力が教師に備わっていなければいけないと思う。また，自分の不得意な分野についても最低限のことについて知っておかなければならない。教師も苦手だと感じる部分こそ，生徒に興味関心を持たせることができたら良いと思う。

そのためにはやはり様々なことに興味を持ち，わからないことは解決するまでとことん調べていくという姿勢が大切だと思う。教育実習でも感じたことだが，私が苦手だな，面白くないなという気持ちを持ったまま教壇に上がると不思議とその気持ちが生徒に伝わってしまう。しかし，しっかり教材研究を行い，板書や言葉選び，発問に工夫を凝らした授業展開ができると，その授業は生徒の反応も良く，皆が私の話をしっかりと聞いてくれていた。

この時の経験やボランティアでの経験をもとに，理科の様々な分野についてどのように行ったら生徒がより食いついてきてくれるのかを考えながら，様々な方向から導入を考えていき，生徒の学力の向上に繋げていきたいと思う。(『論集』第32号、pp.191-192)

2012年度前期に土沢中学校でのボランティアに参加した情報科学科2年次生水戸紘子さんは､授業に参加しながら目の前の先生と将来の自分の姿を重ねて､先生方をお手本として授業方法を学んでいる｡「先生から生徒へ, 生徒から私へ」と題するレポートから引用する。

自分ならばどうするだろう，どうやって生徒に伝えるだろう。そんなことを考えながら授業を見ていると他にも先生の些細な技巧が見えた。考え続けることで，今，ボランティアとしての自分がするべき行動を考えることができた。数学の先生からはユーモラスな数学的センス，英語の先生からは強さを持った声と伝える力, 理科の先生からは多種多様な知識を学び, 私は私の思う最善の生徒への伝え方を日々研究していきたいと思う。(『論集』第32号、p.200)

6.4　子どもの成長の意味

2012年度前期に土屋小学校でのボランティアに参加した国際経営学科科目等履修生の佐藤真由香さんは、小学校1年から6年までの学級に関わり、さらに、高等学校で教育実習を行ったことで、成長の意味を問い直すようになった。「『成長』とは〜自己表現の違い〜」と題したレポートにおいて次のように述べている。

> 私は高校で教育実習を行ったため，高校生と小学生を比較することも出来た。明確な相違点は自分をアピールする強さだと感じた。小学生は自分の思っていることや分かったことを自ら話してくる。授業においても，みんな答えを言いたがり，積極的に挙手や発言をする。周囲の反応を意識することは少なく，表現力が豊かである。それに比べて高校生は，周囲の反応や評価を意識して消極的になってしまっている。しかし，自分を表現したいという気持ちは感じられるのだ。他者を意識するあまりに，自己表現をする方法が分からなくなっているだけだと私は思う。心と体は大人へと成長していく。しかし，その成長していく発達段階の中で，成長しているものもあれば，抑制をかけて退行していってしまうものもある。「成長」とは一体何なのだろうか。教師になるまでの期間を活用して自分なりに考えていきたい。(『論集』第32号、p.168)

まとめにかえて

6年前にみずほ小学校の学校長から「ボランティアに来てくれませんか」と誘いを受けたとき、自分自身が大学生の頃抱いていた想いがよみがえった。教員養成の期間に、学生が身近にある小学校や中学校に関わり、授業に参加できたら、どれほど現実に即して学べるだろう。このような思いを抱きながら、きっかけをつかめないまま大学を卒業した自分がいた。

近年の教員採用試験の流れの中で、やはりこの点が求められているのだろうと考えていた自分にとって、みずほ小学校の学校長の言葉は、むしろ念願を叶えるチャンスだった。学生には自分が学生としてできなかったことをさせてあ

げたい、この思いが学校ボランティアへと自分を突き動かした。平塚市、秦野市の地域が学生たちを受け入れて下さり、先生方や校務さんたちが校内の児童や生徒たちと同様に学生たちを大切にして下さり、ご指導下さっている。学校長が代り、先生方が代っても受け入れ続けて下さっている。大学が学校ボランティアを継続できる体制を整え、この大学と地域の協力体制があってこそ、学生は大学生としての日常生活を送りながら、学校現場に入り学習できるという理想的な実践が可能となっている。この継続は、学生一人ひとりが誠実さと情熱を持って学校ボランティアに取り組み､信頼関係を築いてきた成果でもある。

本稿では、数編のレポートを例示したのみだが、参加した学生たちが学び、表現したことをそのまま生かしながらまとめ上げる方法を見出すことによって、先輩から後輩へと成果を受け継ぐことができるのだろう。これが次に取り組むべき課題である。

参考文献

鈴木（2011）「湘南ひらつかキャンパスにおける学校ボランティア活動とその意義」神奈川大学教職課程研究室『神奈川大学　心理・教育研究論集』第30号